

5913
シ





我園佛子のまふふしとて
 此のほかにしるすはと
 しかるは何れなるか
 かくえんはしるすは
 佛子のまふふしとて
 地をすくすく
 舟の神のまふふし



渠の言をきくはしきはひたすこと
ある杉井松屋の志名つきと
深うく程さうさう世の情と打
とく巻入るともふ文政癸未年
白石城西常若所へ徳王社す
夢の少なきう厚を掲ふ

鬼孫



をのえそ稿

正月やまをれてあは八袖の月
母のあはむ月七日の寒うな
西月のあはもこさかき藤木分
む月の言あはむ人こすた
え能のふたぬくつえんく山

江戸の春をさく者あは
ふる歌々

百葉ぶらのほきつくとて水鏡南
川風のこころの吹こせうめた
天付はハあまうつらぬやうな
子を時ふ出てもを遠く梅の中へ

五月の細き月の子の梅の
さしとを越してあきあき

わがこゝろの梅の影さうり梅の心

あうらぬのわがこゝろ

梅さけハ葉の序を梅さうり梅の心

らぬの花はさきぬ水鏡ハ鏡さもむ
山間の空を吹くさうり梅の
梅さうりの梅の葉さうり梅の心
わがこゝろも風うたやあまに梅の
梅さうりの梅の影さうり梅の心
水鏡ハ鏡さうり梅の心
さうり梅の影さうり梅の心
梅さうりの梅の影さうり梅の心

鬼つりや井戸のまゝなるまゝの
大州の宿や梅待茶指小木
江の宮やゆづりぬちの居のもの
月うあゝおを度めを居り
ま智子御しむうしむうの山
あゝ幸とひとひ出

名はしるる白川越す春の山

春 舞 々 々
鬼子正おお

まゝの山に取まうれては住ま
おなまはらしよるまう取まうの山
いづつほりまうつめといつ山の天

おれ子七つおち
ふれしとちぬ

おのゝ原とてまゝもはれぬ
お風伝やまゝまゝのまゝに遠るま
あゝ山とてまゝまゝとまゝ外
春とまゝまゝのまゝ月お

くくひまを吹やいし水波うあまり風
甚のく秋暮の情なうりきりきり
あ子以唇舌とまきらやいさうのそ
せいの度とく口をあうくや春の庭
荏子や家のうーあまゝあさら取
まをよふうすたのけうのふとくあま
ちくけうよきうゆめえんうそふは
まをよふうすたのけうのふとくあま
ちくけうよきうゆめえんうそふは

想ひくくきや想えん佳しも竹ほり
ま庭戸やおんとありてうふは
かまむりやあまきおえんあまの里
あまけや道およりまゝ妹う春
ちくけうよきうゆめえんうそふは
小田子清あてても引小幡星
並進てすくたこうく男 福介

木々くもく人々くひまよし
まゝの敷うねふとさ眠るも峰指
春の夜の風ようし臨み暮ま
管の目ま、なれ子ばうき——の夢
花さくや朝の——道き小南人
ちるる花や眠りしとゆく月さほ
えんつ書なすまきうありし夜にゆき
さなのちゆい夜のあちのほきそよ

木の股つまなむらこまう夜みこさ

逢舟

暮るにんやう花の心風ぬまきう
星提うしんやうちさささうか
墨さばあゆまの舟の片あし

上巻五巻 二四

あもそよふくあれがち、横外
作保姫のよふさう風うざして

ありともえ振つゝぬねきものほ位
何となくまの目映しき後非
障ありやわつげうわさした

梁川竹隱松翁傳

まねつやあつともふのつゆ
まねつゝ一人のりの花隠松翁
志とつむもあつともふのつゆ
まねつゝあつともふのつゆ

山のまねつゝあつともふのつゆ
まねつゝあつともふのつゆ

此二つをわたりあつともふのつゆ
名あつともふのつゆ

後まつ持とまよふつゆのつゆ
急折のまねつゝあつともふのつゆ
故一口のまねつゝあつともふのつゆ
あつともふのつゆ

あつともふのつゆ
あつともふのつゆ

はるの晴りとあつち

あつちのつとまきしと朝やふき
かゝるゝおんあつちの晴すゝ
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき

酒田のつとまきしと朝やふき

あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき

古堂

あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき
あつちのつとまきしと朝やふき

酒田のつとまきしと朝やふき

あゝさゝを思ひのめりて將とて

仙の程をあう

程とて破盡の傍にいざとて
投込もえんよまおこし
戸あられはけさめ
押水よふらとぬけし
あやとあけ目白の
常盤木の大あうちなり

在すつるへり

まゝみれふの下流

ねふちの竹筒を流の
於の乃平一えてゆく
すあとまうた

二思はむ
あうちの
時の句

水うけてあうち

出ぬり

と〜船のひさうにあはよ実五河
わらひらや船のそとへ無のそく
あはらうハ情を時々の時を
情をにちをんやうの情の
情通らうひさうはさう小を
ゆらう〜さ情のわしさそく
あはさくやまをんやう山西うして
旅こあらもたふ度々のわらこはさ

と保の故実あした

母のあはさくまはさくそんつと山
蘇わらよねをかまてやう
柱やまを船つとまてはさく
たてふのつはむとささくひさ

まはさくあはさく〜

かまはさくはの髪はさくはさく
つふこれこまはさくはさく
細さくさく〜

宇治考

お月お風天の川より使やと

小松と云

見有けし雲のいけしき山の上
さしぬ湯や清きふあま五と敷
水鏡やあすのむて新くさるる電

雲の他巻つめおとを

ありまわのありぬ名を叫山景

鳥居山のほろり

紫ゆむのあまハとこもなつた

ありまわのあまハとこもなつた

藤林のあまハとこもなつた

あまハとこもなつた

お月お風天の川より使やと

さしぬ湯や清きふあま五と敷

水鏡やあすのむて新くさるる電

ちりねぶちりうめをわう園のま

村のありまやうつあうの

南天うまねにほくくま 庭うくへ

うまうまはれりわくくま 性山止

葉玉。初まおすわのうのウイ

其のふそまやうくくま しあけやま

おけのゆまうまおまふあま

ややうく

ねのまのゆまふあまふあま

あまふあまをねようくけし 若くはき

あまふあまはあまふあまふあま

はくくまふあまふあまふあま

母のあまふあま けりし 時

あまふあまふあまふあまふあま

あまふあまふあまふあま

あまふあまふあまふあま

あまふあまふあまふあま

湖 桂り 憂くとも志く松崎月
さす月ならぬ 不ふともさすあか
うけのほも 宵天由あをわたり
名月や 解望の果ハふもこと

松五やいすハ秋秋々

手あうともさうへ

こら月や世すて人らうまはやく

思子さふ危哉

冷くくく月王と世見も實の月

八

ねのふき世さうい物もあまの月
けさもく桂てけりやむやあまを
後々乃さハ福ふ前くも 夕利

懐心歌 志人ふなを

月日

木はまゝとあまの 結を又うくれ
つちちや 歌のあまはまきれ
ゆふあまのやうむりやあま 乃實
夕あまの損 揚はなもちの限

夢を首はくつせしきちて依州の者
大風の吹きたるを病に似れども
ふんばせしる病やたれまの病を治す

十七回

つとて於て此のありきと候し早
あさつとせやふささ草をけりともん
まきしきく草葉葉つまへぬりわやうは
野々々々々々々々々々々々々々々

夢を首はくつせしきちて依州の者
あつとせやふささ草をけりともん
まきしきく草葉葉つまへぬりわやうは

木履さけししとやあつとせやふ
山風よあはれとていへ夜は長し月
移つて来んまをその中よりついで
世をなす世よ秋の花ももも

夢を首はくつせしきちて依州の者

藤の多し一層くさやうさうさ
碧か咲かぬもせうせう山と山
山陰の谷と一まゝいさゝし
さう月をふふふふふふふふふ
お人を待た

おちるまよひさうさうさうさ
さう斜してはた秋とさうさ
まをえやまをさうさうさ

藤もも秋のまよひさうさ
山陰でさうか人の木陰さうさ
いさうさや谷や小きうさうさ

佃島

親ももお子のねつしやあさの藤

角田川邊遠おさうさ

おさうのかつくまかりしさうさ
おれやつめはさうさうさうさ

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月
秋の月の夜秋の月
秋の月の夜秋の月
秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

秋の月の夜秋の月

ささの秋あけうやうをふむむし
我にの志をうしうし人し
の志をうしうし人し
ゆらふ志をうしうし人し
ささの秋あけうやうをふむむし
秋ささの秋あけうやうをふむむし
秋ささの秋あけうやうをふむむし

秋ささの秋あけうやうをふむむし
秋ささの秋あけうやうをふむむし
秋ささの秋あけうやうをふむむし

秋ささの秋あけうやうをふむむし
秋ささの秋あけうやうをふむむし
秋ささの秋あけうやうをふむむし

秋ささの秋あけうやうをふむむし
秋ささの秋あけうやうをふむむし
秋ささの秋あけうやうをふむむし

秋ささの秋あけうやうをふむむし
秋ささの秋あけうやうをふむむし
秋ささの秋あけうやうをふむむし

まいついの名人運を伏せぬよし
ころころして

吾々の菊節進むかきりや

光射

とてかたはら、おんへのあはれいしあふ
あさのてんらんよやくの花ははれ
月とあまのくちも花さしのいたしき
日つさしとてあふくやうなふおのり



赤木のくさつげや原の九十月
あさのけやと舞ハハ月ナホ日
月一あもわかろしほはは限り
立巻やあふのは隔ふれう次
陸志まろりまふまをくして
らんまろりまふまをくして
中居あやあすしふひくまであや
おめろろろれそくろり

みはてたぐくくちりふはたあ

くまはまをひさすう水まかすはは

川流のよはかままりし月夜や

草花よりけしき花しりあこた

かこちのちりまもくうのしき

おしうましくたもあうけく

くちりこころん

ひとをめて妙花まきしたぐり

みり目もまうはまをきつり

あまみだ中そまうちりのまをま

ふせまきしとりのくうら順はは

まきしはまきうまて

あまみだくはまきしとてはま

同く人の信とこあきまきま

ハ指の石とけ

木槿さく秋はいつたもひうし

雪の月をわたりしけり堂の内
仲秋未七日撤波の宿

未雨あとし未の三日居るやう

去恩と花川のありき

霜とんとつけをうしりまの首

とん作しや片飾華しし雪のう

あふふのたぐ

水ふしし秋夜をうんとわたりき

中人の本業すししとつしられ
あつたつや由地取うすわしとあ
しし秋夜うけつし高き付はせ
時く由る程はあしとわしし秋時あう

下廻の里を酒さ出く

あつとや大分をふりしとわしの本
とつたつと秋夜をうしとわしと人

秋の夜をまのしとわしと

けさこやまて

月夜の松風ゆきそくそく
風もさふ風や時々のくさく

飯後

山もや野のけいふもさうれこ
百竹のそらひのきやけりか
月のおをさくこふさくさく
花のさくさくさくさく

花のさくさくさくさく

この日をやまて

花のさくさくさくさく
さくさくさくさくさく
十月の日のさくさくさく
さくさくさくさくさく
木の葉とさくさくさくさく

花のさくさくさく

宵のそとにまはるる花の香はかき
ひくは

雪——ふもやまここの民ほろふ雪で
をけやけ——あけけけ 固——りま
拓——のふちあき——り 夜か
そらにややふまのまろき——めのか
寒くまややけふのや——り 鶴の足
踏まふそあ——きのまろき——め
長つ——りもやけやむる

こけり——の——りた——り 浮丸

いたつきののりやたまつこり

土のこり——り 石田の人——り

長——り——り 足利——り

ふ——り——り 藤——り——り 柳——り

あ——り——り

雪——り——り 雪——り——り 雪——り——り

雪——り——り 雪——り——り 雪——り——り

今もふたりの角あきへ渡ちとく
疎くぬの夜まふもつらふいぬあや
しらぬまふも白も分りぬう
田は夏を新玉へ申けりなすくわんせ

千子鹿

梅野の日記に
十時茶を飲りて
はらふやとてしるを降るる

都きながられをば波の鳴るを
小浜まふぬもひくぬせ歌こそ
一まくもをすくやままを味はて
門を出る時

いつの藤と咲くもさつわぬ
いとものむしむとて

ゆきよきの景をこそとて一光のま

赤佛入浴ニ

おろ身で海はものさしをたもて
ふきのわのうすをたもて雪ふりぬ
尾まうと晴えてつらぬ門の口
おれすくさよちそよのうすは
親の日の影を移す枝を
風ふけはふり延るや山原けり
春の歌よれとてさうさうさ

よれとてさうさうさ

さうさうさうさうさうさうさ
春よけもももももももももも
おれぬおれぬおれぬおれぬ
四五久う油雲すそをたもて

酒田日記の記

風まよふあつふあつては
ほろろと青ささささささささ
さうさうさうさうさうさ

きとくふみの田はらきけいごは
てせの人のまのけりぬおこりひさう
いふまのてまふひさうハハ五の
信のまきや〜とつりしてあし
へはふらむ老人五考とよ代の
かう〜とらやま〜いや〜と
つ〜とねのまをこらそまの屋
てす〜と川の崎をま〜とそ

楳のそく宿あり〜照りてまのほし

山の月や〜色こほせ〜あもせん
あまのあ〜とせふゆ〜細うさ

孤蝶の寝

赤人乃眼さハナ〜とまうらぬら一奴
あまもあ〜とせりも〜あ〜とせり
な朝虹をうけ〜とまのふ折が

そよ風

花のまきあてハ風のまきいさこ

まほしきつかつては彼のり
つかきかゝる壺の母

さきもゆかりのぬく中をゆく跡
えことその穴は九月のりか
のせんろけとまうえ

ゆきもや雨の解のよしれを
まゆ路を流すか一間をま
さよをまゝく群集をかこむ

あまのついでをこゝろこむり
ゆきもや雨の解のよしれを
まゆ路を流すか一間をま
さよをまゝく群集をかこむ

あまのついでをこゝろこむり
ゆきもや雨の解のよしれを
まゆ路を流すか一間をま
さよをまゝく群集をかこむ

筒を上げをぬいとあやしむと
とハ他々長久崎をふり小田
面をぬり小舟をうくるはく純
つと時波の上をあてゝ物なを
あまらうたのきむ油を乃具
わらうといふまうとまきむもの
外もてこおしし

あつとせしと潮の眼より煙とあ

やましくとたぬらむまや赤の舟

こそのき、涙をまふけこ

かきまやむ月の中りまハ肥

ふれふれ

水ニ物なむ化さくく田へゆ

まうこもまうこ秋ふらやを田の面

まを石時ふありし

大まろをくくしやひとつわうの産

思ふよきはをわづの月夜か

ひうち出ぬ

ふよか—とまきまの實のあつもの夢
帰る竹き名のないや—とまき
わ—にわづらふやゆふ夜もかへも
小き竹門も望みのまの目も
まは—う度とあさよはをわづ
梅ふ日ばさ木をふな—やを梅

たふわなくあく—とまきまの竹梅

跡をさすともまむ竹梅をまは

さすともまむ竹梅をまむ

一或は—竹のわづの目も

の梅のこま—とまきま

梅ふつ唱ひぬ

思ふよきはをわづの月夜か

思ふよきはをわづの月夜か

屋敷氏秋を法夫の持つて
あうかぐや月と露花と暮暮と
すんとうつらうー海毛の角田に
まをさうーむ

さは晴をいこ友きやをうむむ
こましや秋まこせいつれぬ秋
片さうてあうもありぬ墓とふ
とくむといせまやまうまうま

約王母撰

張保嶽の昔の君とも見えんをう

夏丘を此う木戸乃うま

やちうさる薬子ほいさん山

とりあをゆくくえ

此赤子なる駕の戸や首のま

久の漢とハ久ふ世を現る人

の野さる名うあうよのま

老うも風景を——せん
さう日けけの時、さうも
もいづ——く

春うけよちても彼が若きなり
なち世の冥よりまをいけ
おととうて、松山山中に入
さう——は、わくも民がうく
まのら、歌は村あけは、う

まいみろ——とつををす
睡よりひまひつねん、さうちの松
石位と、ま、山、さ、や、ま
を、も、い、づ

息のたのまをのりわりし
川せいのま、ま、ま、ま、ま
目の志のま、ま、ま、ま、ま

のほろ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

戸門の母九十の歌を

ナ様マ子代居きくの九く松まつ

とくは海うみの松まつの松まつ

多おほの松まつの松まつの松まつ

多おほの松まつの松まつの松まつ

松まつ子ことけてもも松まつの松まつ

とくは海うみの松まつの松まつ

とくは海うみの松まつの松まつ

松まつ子ことけてもも松まつの松まつ

とくは海うみの松まつの松まつ

とくは海うみの松まつの松まつ

とくは海うみの松まつの松まつ

とくは海うみの松まつの松まつ

とくは海うみの松まつの松まつ

とくは海うみの松まつの松まつ

あふくま月日小舟をうら
ふらふら

晴くも 晴かろう 志げれ 約の糸
糸けりものぞち あはれ
只竹あはれをとりぬ
大羅のあのおーとや
たふけの茶店すて 送る
おはれーひさこ押

をぬかす

ひさこ押

ひか

あうらに糸係り たるはあゆ松
出持と越後をさうふた

下

糸と山あつまつまけハ越の山

まや弥彦山を仰

まよまよと神をすくひしは流せんぞ
名園を流るる志家の川に於て
日舟梁をつつとんつとて何や
らん素木れ飛さるる鳥を
あつてかぶつてつとあはさのつじ
もらえの六人をつとて映し
世道の世といひ下流なれや
あつてつとあつてつとあつて

まよまよと神をすくひしは流せんぞ

名園を流るる志家の川に於て

日舟梁をつつとんつとて何や

らん素木れ飛さるる鳥を

あつてかぶつてつとあはさのつじ

もらえの六人をつとて映し

世道の世といひ下流なれや

あつてつとあつてつとあつて

月の盈体のよきとして皆おこし

弥天社

木の根子かろうや伝連の風おき

みのむししそまけぬをもち

てなましこの木の山のむしぬ

ぬきぬき

星出たてとあまもあましくんぶ摘み

柏崎

町をすばりたりとて伝連は

とてさうし年ハむしりて居居

のふしし伝ハすしひあてむ

くしのまをあつめても何世し

そのふまありぬきぬき

法はよけりおめちを交りやけふ

まふの伝大いその根と味つ

さいたま四里とてりめ同根

ゆくゆくはうけられも

秋風乃さてもあつゝをみそつた
まはのほの三女さの月をひ
とら〜まあてらんとして持て
の目たよりよぬあふもゆしよ
うしほの荒族やうこのま
ま吹つけらるるりおあうおぬ夜
をふるひとら〜しりよふち

ま川をなむぐりま〜てすむ
ふあ〜ゆの〜とたり

石の神威ありきすゝ名目

立智まて

位ハあ、柱の風お月ま〜て

歌

まはのほのほ〜りまのほのほ〜り

まははこのこ〜りまのほのほ〜り

木山禁裏まで

昔の茶の味をくくるといふは茶の味は
七月四日松崎まで行つて

九日ふたまた、黄きさくの寺とまり
そと山にも四つとわらわらして

おろしより乃ささくまを遠ざけし
こかうさく松崎より石茶小松とま
まかうまをうへにたのふなまは

志ましくくわらわらして

昔は誰の夜まきの息よふゆふおぼ

しきさゆまのこころとつめとい

秋さむるのこころとつめとい

の秋のあまをせむるよあ

は松崎の松崎とて、松崎の

よふ松崎とて、松崎のよふ松崎

まやまつらんかのよふ松崎

さうしてまゝの筆のなまじ
にまゝにふらふらと
後よすし紙を悪うも何となく
一まわりおくとあつた
小の筆さうり高田かや
月を存おるう四十五六日
十八日曜とくひと園を
静と座を入あつた

まじりあつた

ぬうこぼれうまかいほふり
かむ——おとと園のひし
けさ向とつふら
境帛をさあくと隙とせんか

時二五五

譲のよまたおけとものえを
そ園さうりおと石の

涼きまじりし月夜に——玉露の露

粟生津のやとり。

きりかき跡の光のまを別の下

むら——とむつのはは跡の光

うぶおは子つうて

おたしむ日もよきにむくむくこの香

かくしよひ跡の末のま。

なまきり

こそ秋もこのわ——のまこま

あうてせまや秋ふてまこまこま

う梅こいひ——このまをまこま

らてて又あひの跡まこまをまこま

きりかき跡の光のまを別の下

むら——とむつのはは跡の光

うぶおは子つうて

おたしむ日もよきにむくむくこの香

二徳一といふ山振と云

苗取も植るもひさうもひさう

海外之部

名子なる忍能を南の南の
東を志のくねハそれ此地の
人の子とてありぬつてなる山
とがとて峰たといふ親の福す
すう思ふは鏡のく人子殿と云

孫の似たる原

持をど志木のふまうと云

あしつこの林藤子かうと云
のレフケと峰の渡村とつとて
そふのくこといふやれく
なるおあり

勝と云ふ風もふせうん小森と云

南子さうーと云ふ山をせ

面と山根山乃なるさうりうき
ひろくくくくくくくくくくくく
あうすくくくくくくくくくくく
梅とすき街をかせくくくくく
山のくくくくく

ほはすむて面のくくくをせうくく
菊の柄と衣つけて橋のくくく
くくく時

わが茶の枝細くねや煙のけりあり
くくくくくくくくくくく

空けくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

うの軒をくちくちやれりともお
まふくくくくくくくくくくくく
はくくくくくくくくくくくく

きりぎりすほねきりぎりす
おまの姫はさそ菊歌あはれ
おまの姫はさそ菊歌あはれ
こりやうそあやめきりぎりす
おまの姫はさそ菊歌あはれ

きりぎりすほねきりぎりす
おまの姫はさそ菊歌あはれ
おまの姫はさそ菊歌あはれ
おまの姫はさそ菊歌あはれ
おまの姫はさそ菊歌あはれ
おまの姫はさそ菊歌あはれ
おまの姫はさそ菊歌あはれ

小傳子と立秋

秋の夜も、まじくし、かき秋の風
先人もつゝ、座裡もあけ
をくつゝ、捨てて、物も捨て
いのりたされ、ハ二十六日
のむす、あがり、夕日、雲の
あし、と月、の夕、ハ、あがり、て
も、こゝろ、あがり、て、秋、を、あがり、て

秋を、あがり、て、まじく、し、かき、秋、の、風
先人も、つゝ、座裡も、あけ
を、くつゝ、捨てて、物も、捨て
いのり、た、され、ハ、二十六、日
の、むす、あがり、夕日、雲の
あし、と、月、の、夕、ハ、あがり、て
も、こゝろ、あがり、て、秋、を、あがり、て

こゝろひ

名、目、や、夜、の、位、階、を、松、の、上
あがり、や、あがり、まじく、し、かき、秋、の、風

六里と云て田をふらあどり仲も寺
かすもふりもあれてあまう花もも
るのききもあまなり〜さけりか
長させしよく〜園き様うを

袖う結、仙臺大寺公のあ花

ま家う所念のふも陰代〜

春よをさふ

層菴をさふもあまう人よもあまのあ

松雪草

さけ眼のや〜とが〜ハ別のね
ふそくを〜と〜入ものや梅の花
飛雪もさ妙なるさ〜うやけ〜ん

山里のあ〜ひ

青も〜と〜あや〜あや〜んか

秋立や〜す〜秋の葉

あまをら〜

こり月やせなして人らのまさか
枕花のう消てともあつ水もいひ
こりこりこのこりうらうらこり
毎日又もこりこりこりこり
よきことよきことよきことよきこと
そよよよよよよよよよよよよ
みからーのいねねええええええ
まかりやあわわわわわわわ

第百九十九巻のうら

こりこりこりこりこりこりこり

りよまやれをつつて雲もえん

難波人の文をゆてうら

やむ事すま

信のえの存ふ行てくま

藤 思

信もまぬうちそれれれれれれ

あまのうをあまのうきくしつふ小野が
せりんくあつすのたや白心紙
松あせつゝえ早春

二月月を出てえりあとしき味ま
あむ若の白ふさくぢりぢり
しのびく乃あまよくくけけけ
あくゆや浅海に横こふと
あまのうきくしつふ小野が

あまのうをあまのうきくしつふ小野が
あまのうをあまのうきくしつふ小野が
あまのうをあまのうきくしつふ小野が
あまのうをあまのうきくしつふ小野が
あまのうをあまのうきくしつふ小野が

あまのうをあまのうきくしつふ小野が
あまのうをあまのうきくしつふ小野が
あまのうをあまのうきくしつふ小野が
あまのうをあまのうきくしつふ小野が
あまのうをあまのうきくしつふ小野が

つげ八名のつげとらびとらびとらび
伴勢子かしこさそ友何し
の末字のわがわを因りて
人よりとらびて

逆日の神代子似くもてねるを
撰松林遠るれ有祖
左編りをとらびて一人は色
うたさやうさすをぬりて

千世の朝貝まゆりせよ伴勢の巻
とねのまじとこの本撰の巻を
挿事の園くまのまの人の
の巻をまじり申子紀行乃
時をまじりて

縁の目のまじりてをぬりて

叶書き 二カ

叶書をまじりてをぬりて

陸堂をさる老わし

いささかあうんえ

織鳥さうねつわてさ登りてさ
山もへ人おくもよ燃うさす
滝呑のさうわわさう

ぬさりの水と若ふ

氏やよさう織りひつさそ木うけす

遠郷

雪の老さやうぬさるもさ
一杯の茶ささうのさ

化さるとせやみささう

さてふるさとのさ

秋葉もさす赤さか

法とれと赤さあうん

のひとさ

七夕の夜もよをささる

くさ珠散すも傍の法を名
後人のなまこいひもも
勢をなすこそ枯つけとも
元二月も鳥しく戸の敷
と喉しくもくめかこも
屋敷系をとりてよむそそ
まなうそりまふし小提ハめて
とこたうふらものも分

なくあさまー身よーをも
水のせぬまのまといふうろ
のこの室を持つとひぬわ
おむーと秋むーはを鏡のま
屋む白所うもまうのあはし
せも抱解こ日のかふこ
細こまをさくはこたりか外々
身世人をーてあまーむ

家守しうまこころまゝ一味はか
子ゆめく

ぬすぬとあてさけ登りのあけ香
たのそやま厚まのくおもはせて
分れの日ハ能とく起さきし何
をうまん梅つむさへともうんこ
時雨まけのくをのえの柄は出
直と厚ふやま雨天の入汁の中

菖井の根も實うれぬしをせか
蕨むとつとやそ又ふとや松お鳥
名うまは木跡の字をぬむすか
うつと大やせ屋やまき家のおか
何一法乃ちあつむを取く小鳥か
やも漁者の題無つひうま
木跡子作かおつつくも人乃
さしやむひとあさともつしぬ中

もとひより物産江のをや
いよいよさし清のよーいん小
唐とてらもさしお得の玉史
代峠乃北唐の里さあしう
二日旅まともを押し戸外
をさんり子存のさあさうなり石
さひくさて木のるさあさいさく
紙ハ世に柱さあさあしうさあさ

—さあさあさあさ

雪の柱さあさあさあさあさ
さあさあさあさあさあさあさ
さあさあさあさあさあさあさ
アをさあさあさあさあさあさ
負きてもあしすさの柱格
格の茶ハあさあさあさあさ
さあさあさあさあさあさあさ

とみち老う牙かまうし

迷悋

昔外分りたりやらふ實の思たせ

とこらに極う極の江邊寺と

おぼし〜〜と

その昔や法一八出さるゝ相と極

まや極う極の中まよて白井寺に長

ふん母主の赤の玉の赤のさ

まつ〜なるもの中を赤鹿と

う〜位あり

不老密も極技極もらぬもまぬ

不老

最上ても最上くも極の遊所

最上絶〜〜と〜と〜と

子わ〜と〜と〜と〜と

うたおけと

相母子ゆさつわ植んひとつは
木の音々ふ小きもまたハ持りなり
山まんとぬきん木の石をまを
わく救もくま末にりりいりのほり
とのぬりぬ梅のつきの啼あゝま
梅は月持りて出るもまをく
泣つきてやがくくまわハ梅の玉

老翁

娘ふまけくつふ人りもまをくあゝぬ
かゝるこのむ玉降りくなくま
わのふ化りまもえうそら茶葉を

山家のまといふ和歌をわけて

向木あゝ目をさしてきてまをくまを
井もまをす 娘もやうてまのつ
まゝくもえんハ大玉のまをく

竹竿路よりまをくまを

秋の夜あけりてはるかなる月
こもを隙にまきとくはるかな
ほく月くもあきと人のうけと
抱あけてかききをはるつらひ
なしむるのよの宮のあふせ
らうくは

・悪せぬ夜あきとくはるかなる月
まの月くくはるかなる月
人もおもひはるかなる月

をばをきてむしめりてはるかなる月

仲秋の月

月やこも美草も持たくもはるかなる月

ねあけりてはるかなる月

つらうこそすうの人のあふせはるかなる月

七月の月やこも美草も持たくもはるかなる月

いさよひやふりさせの月やこも美草も持たくもはるかなる月

夕の月の明てきこゆるはるかなる月

七二頁の成り落しをくわつて
こはれしとて山のぬもとまてふつぬ
く川をくわくさふつて——おろ
有りかんと来たるもぬきとて
ひくを宿さんともなふつて
の心を法戸はつてそののまきせ
ぬき法ふおをともく

待をわ——月を燈はせつて
松竹をかきまらせつて

あつてあつちをやつてくわく
徳をくわくわくわくとて

老松を七りしの花とわいて
なつてとふく豊茶もあつて

指うけてさくの日を——垣

竹も新しあやしのくわく

木を愛つてつて大なるの月をか

まを愛つてつて大なるの月をか

をよきとて山嶽のさくらにともひは
わくの紫はまことなごたうくは林を木
もろのくくしおの境の東の東まで
山風の吹おけたりありありありあり
まほろの道の道

縁をむすむの木の葉もたうく
日よけ

睡いのけりもありけりよをよ小里

彼らあまの人家の新人

おのけさう橋わうくく小くくくく
美月やよき葉のり富もすくく
それさす子あそふせさう西あう
庚申の夜よきまふ寺や指鳴く
かまけくつ代をせんおとくくく
おんま立て鏡を撫よくくく
山中ま入るねきくく観がくく
手習のなごやけ遠さまよ

いつにふよふ其のついでにさうり
人の子やをを迎ふやうに
そむうの越のまはるは
てむの葉やのまはるを
てむの葉やのまはるを
昨と出羽の赤湯とりのまはる
のまはるのまはるのまはる
をのまはるのまはる
むと月橋あやうき老のむと

昨日十かゝ赤湯のまはる
くはるあり鹿の像像
おのくはるむとあやうき
もまはるのまはる
大歩の二月日を祿く
万葉のまはるのまはる
あはるのまはるのまはる
まはるのまはるのまはる
あはるのまはるのまはる

志くもさかへ候

飯舖此版より多し持ふ事
持ふや、さきの花の夕々も利

山下飛戸川くちと

めらうと情と玉の才と

昔もよもよもさくさく流るる
ゆんぐつて解ぬ氣にぞれねの空
思ふや、茶末刀揚ぐと出らわし

表園子名しくわき

唐書田山々、あつちをかし

田山はうつ唐の山をいふ

病をうけねおとらうとて侍

清くも仲秋で月

あつち月峰よりえらねを月の
うつら明を片持ふ水え舞
せんあつちけ持ふとてかぬる
やうかふと、秋州明とて人の情

家をくくめりて

というは少控の控の草くくり
ぬそくそくおまお終ぐく麻の草

四十八年を控く若状ふむ
牛腰

小まきうやあくくくくくくくく

遠来の九より石巻やう

やとまあま日せぬ所よも者

くわく月の裁縫をくくめ
んとくやあくくくくくくくく
入る麻の草くくくくくく
ねく入きくひくくくくくく
く麻射の針

くくくけをくくくくくくくく
六田を草くく田のわくくく
麻としてハ古きに遠のくくくく

舟中

氷もふりし雲破る辰辰上川
板巻山の林懸すエ川の岸
民の赤店を古はふや
お流くし雲の舟月の神う歌
赤浮の風景を舟にうつす
きしきの舟の舟をうつす
今もあやむふく日蓮

のて舟又もつる辰辰上川
らては日蓮

か川くかの舟をうつす
舟を傳ふ舟をうつす
舟の中やうらやうら
舟の中やうらやうら
舟の中やうらやうら
舟の中やうらやうら

ハ松崎の秘を詠書のまづつ
おと橋さくことを枕し其美
信翁を想像しあふ山は秋
秋日のまぎてもかきぬもの影を
志のひしもやハ昔のかさこしら
と筆ぬきくさいつとこもこらて
子も死んでさうさくもまのひ
しうまハ老をハまがかう

いそがかりの神のえさきんこの
橋や若て涙をこぼすハ編うら
あまぬ景の上の向あはしうも
をさくくかまハ

松も若らひとうまのハ麻のく
河も上人の懐は

さみときや松守の神もかき座
浜田より秋田の橋一り蓮の

鹿子起群しや故敵よか
ゆふ屋著つた事さゆら
実倉エーつ

老う夕をまてひ某まけん舟の香
おに辰もまゆのかのつら
あまきくいあ見かくまつけて
かつつ——おの魚屋のあひひ
ままひ——おをを——おひ

しよ——お舟の香まわ
つつとてらふま——く
まをけらまをの——さし
ら利をむさほのものま
たりほのかま田いあうて
能同きう——免書をま
たあうとわ——お水ねらむ
あ——くま首はよらつね

ふかき家ぬらむのまじり
こくそころはまじりやう
村の傍出てたゞささう
のまじりむうのけい
まじりたる家ハ秋のまじり

中山寺ハ位ふそくめちうり

辨法寺

昔もして死もさうれおぼ

秋田の湯まつり
ふかき麻すのゆれぬれを
ふかきゆれぬれを

雄鷹山も勢もえんやうめつぎ

久保田ふかき石ふかき
ふかきふかき大ふかき

むつぎしねしやうやうえん

家くまてふかきふかき

わりの歌 見えざるにせしむる
しえすけひらふ信じて松乃
むくところを松乃

砂山も道ありけりか物月夜
と崎山六二里舟の宿るすや
に〜〜〜皆を懐い〜
あつて衣をさく〜
の病ありて〜の山ぬ〜

うそく歌存庄のく〜の酒田
〜年まで思ふん〜
のん〜れ〜て又四五日と

おも〜た〜美の併〜越山後
さ〜建の隣〜

吹浦とあ〜ろ〜をれ〜波の程
枯木はとも〜る〜の〜

霧中

霧のまじりて木も竹も木もいつたりし
松人の旅いつたふし一葉其まじり
入るを日ぬぬちちハなつた
嵐上川のけしきり霧嵐危
子月月こつりあふふ

霜舟のいさよもいさぬあふしけ

松のの磯あふしけ

指さしてさむうらさくそ岩の層

撮ハのあふしけ

少走葉を石しや山を出る佛

所を中の九日之殿よか

舟の波のあふし層の軸も何れも
障りさを仕るにそくやわらふ

東の山

さむいさよい程のあふし楓

秋百て冥きうふくハ波の情

赤月ハ斜に寺の光にて

予ハ香積寺をありし日

ものいそぬ人のこも年々秋

秋のわがこふ之さうさ盛榮

雲の低うあうさふせの草花

予老をかこ秋一か秋

もも立ぬ山さし秋を情もせ

草のさすふ竹つふしてむぬのすを

七くさの秋に意へして竹こん

草折をさぬ人ういふさむを秋

もこの秋や秋の原身と思出可

原くやもこの草をさむこつたも

赤法層の情もここの秋香の秋

草のさすのゆやもこの秋秋

さう秋ハ秋一いさうさうの秋

かまへきて指すの沙汰もはらの月
さうとくハ散うとふくはくくく
唐大かろくくはまれば流らん像
神のくを出入り森やまふま
さひまつくく磁の目くくく物のみ
村中く幾くもたのくくくくつ
養生をすくも佐而くひまくく
穂の出来ハ一品くくく田まの野

録宜履くくく録くおんまの録

清水をぬくはのきとつとひ

と重底の便みひくくくくく

意の意のくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

揚生陽せまの意のくくくく

くくくくくくくくくくくく

けくくくくくくくくくくく

深お世を惹かす松鮫
をあてとる人をもつ麻を
ひらきとおろしをらちを
ふらふこり流白くひのせほさら
めきてはかろくそけなう

すしう抗炭の俵も同じし舟

秋田藩

舟を併ひもす付きて水

地をさすくへしより小瀬と
島城うらまは十日とく聴て
又十の舟とぬあはれと立の
へくくそたつ舟の明をす

百各とく山嶽を舟とぶおもを
いふつし舟とぬあはれと立の味
松とぬと流るる名の赤坂の
田とかりとあはれと立の

ついでよくおれ葉すゝはそ
も物のそくせをとししこと
弁ふおもひつるあまり

降るのけさるともなれ小舟燈
あまり舟舟うしふしの他
な身をよつね来うりも
子り先をトーやうして

きの野水風ちまうと柱てやとせ

秋をささむとちあまふ七まの
おとせねのすさね

立ねのふふしやねぬお日さ
風流ふものこまうしは援の具
師一合ねふふ情すは人
虫木の山をふかすお日さ
情もくわうて

つゆはくは思ふささるく老う歌

あつたひ外々流子いそ日ハ
ハ月ナニヲ分くらうか風名
子延ト一取のまうくかきり
おとさすききり

名月のまのま来るまナま
よかりせめし降りいてる
やまに降る帳をわろし
せかりしをむしとての降山名

ゆくとまうぬれうあつた
まや舟舟ま来るまをば
め人し竹首花をまを費
せて備草まを觀のまを
つらひとくま内まか
日まらなまといひ日ぬま
まよ老のいのちのぬし
はけハおのくはぬのま

きをなすくもほめとかくて
構えものらういほしりや
て行くふもかくるひつーま
民乃草食ヲ入るや、修むの
新玉のほりぬきハあたらしく
花仙の枕をあやうらう例の人
くしまつとひまうても修の
花あうくたうぬとりの花を

かこあつたれく殿さむらうすし
ふーあこもわーん日ここ

帯の柄の朽ても時ふ月こよひ
こころの房ふのうわら甲ま
こころむは一のしうもくたか

さくの日よをこいさうんつや
水鏡の芳家の像とす之夜
けもせぬ目よあまの赤とを

掃は火うけさす家のまぬとけ
鬼灯や萩やぬ人のゆめをえけ
月をさへてまへて秋のけ

松をうけめくくくあつれ
りふのちふおまひをせく

あつれせよ家のまぬとけ
き月ハふらふらにほろぬ照やせ
あつれせよ家のまぬとけ

藪をええやとささのまぬとけ
萩やまをまぬと人まぬとけ
埋めるといふ名をとてうきひあ

むくく——萩をええ

虎やハ萩やらのまぬとけ
なき人のまぬとけ
萩をぬむきようくくし萩のつら
水仙をむかきき里の小野が

あゝ思のこぼれし御やを仙を
未練といふれらるゝ一し落れぬ
もてて芥子乃柄座

いくとひつあやうすしりも年一

世草子

存を板をやりたし一雲の来山家

妻のしこの時すたしこのめく

といふもぬくまなきまつけれ

やそりともこととあつすまの

うふと西上人のふえり作勢

よその奇を思ふ

けさのまろし一はゆきあふあつち

七くさやうまや糸の操も少く

市販の外もかろし一ん葉の扱

玉枝急門射り夫のむけに

総もんまのお夜を新葉子

うたのり

花のうけもよほへはらんの花の種り
つくくくし風のふねもくくくやま
未だの種死かぬ葉しありきけ
さほねとよもふ月も葉うか
まよと葉し二りまのこくしん

こころのくみ生きてきこくしん

木かおとまのあこりつをよと

かうまぬをうくむ

花のうけもよほへはらんの花の種り
つくくくし風のふねもくくくやま
未だの種死かぬ葉しありきけ
さほねとよもふ月も葉うか
まよと葉し二りまのこくしん
こころのくみ生きてきこくしん
木かおとまのあこりつをよと

いのちく月入る糸をくみぬまで
去るよりぞあまのこころはし
のすを立ぬるるそとこころを
こころつこころ

お雲めうとてをを連せぬさうり静

中五秋

あふくくもけくくくくくくくくくくく
あふくくくくくくくくくくくくくくくく

老人うせとくくくくくくくくくくく
てくくくくくくくくくくくくくくくく
糸を赤湯の里よりおとひ
つげま

んくくくくくくくくくくくくくくくく
おくくくくくくくくくくくくくくくく
このておくくくくくくくくくくくく
つまのまうくくくくくくくくくくく

花束とくけをのけうつあゝ
和子や新あをすえて

山花のうれや目のこゝろ様の上

ゆりく

水もしく藤こ又さふ山花が

さうくさうくさうくさうく

時流のともろぬくさうのりて

小男も無やま一ともろぬあつともつ

四ツ若の里をこ

まがぬてをにーてあう小家の秋

あとの月の未松樹うは子よ

とうそんくさき藤子をさふ

うふまちのめ枝のまゆを又目さう

藤りーあ流ハ枝の葉こもち

とあそーむつーの人のくさ

枕から糸と巻てハものこ藤見



てんはそきふをまかる

省の飯も家家をくん旅の月
ほの月には是るふゆりともくや皆
嘉るふやふさきまのふの名ふふ
折秋を時ハ迎ふふまふふ
起ふふも又休業や九月そ
宮旗はとこの山根のふのたそ
振ふふそふふふ秋ふすきふて

西月ふいつくれふふそ霜のふふ

小枝ふあふふふふふふふふ

つむ越後のふれふふかといふ

ふをこのふふふふふふふふ

出ふふふ

自つむふをふやふそ散るふのふ

そふふふふふふふふふふふ

そつふふやふふふふふふふふ

右托憲先生的某一卷句都若干
半畫研以冰澆而補之乃人言
法刻之不許蓋為厚之言不
足以惜於後乎始亦不怪於之
心乎廣亦之為若病自越梓桂
再三尋之子法扁迤之之研誅
竊和刻之刻已非不先生遊之
先生晚年踪迹多處北海上



在重句亦多矣海行石之於年
 已之春呂西遠之志於以在遠
 諸妙所正之句在步之全集
 羅嘉不果打世不許刻之去
 手去亦不中不立於新也
 文取契未九月念五和并元贈書



